鎖全体を左右する一環をつかめ

いうまでもなく、小ブルジョア的無組織状態という自然発生性（これは**どんな**プロレタリア革命のさいにも程度の差こそあれ**不可避的に**現れるものであるが、わが国の革命では、この国の小ブルジョア的性格、その後進性および反動的戦争の結果のために、とくにつよく現れている）は、ソヴェトにたいしても、その刻印をおさないわけにはいかない。

われわれはソヴェト組織とソヴェト権力とを発展させるように、うまずたゆまず活動しなければならない。ソヴェトの代議員を「国会議員」に変えようとし、他方では、官僚に変えようとする小ブルジョア的な傾向かある。このような傾向とは、ソヴェトの**すべて**の代議員を実際に管理に参加させることによって、たたかわなければならない。多くの地方では、ソヴェトの各部局が、しだいに委員部と合体しつつあるような機関に変ってきている。われわれの目的は**貧民をひとりのこらず**実際に管理に参加させることである。そしてこれを実現するためのあらゆる方策――それは多様であればあるほどよい――は詳細に記録され、研究され、体系化され、より広範な経験によって点検され、法制化されなければならない。われわれの目的は、勤労者**各人**が八時間の生産的労働の「日課」をおえたあとで国家的義務を**無償で**遂行することにある。こういうことにうつるのはきわめて困難であるが、この移行のなかにこそ、社会主義を最後的に確立する保障があるのである。こういう転換が目新しく困難であるために、当然、多くの、いわば暗中摸索的な行動や多くの誤り、ためらいを呼びおこしている。だが、こういうことなしには、急激な前進はなに一つありえない。現情勢のいっさいの特色は、社会主義者とおもわれたがっている多くの人々の立場からすると、人々が資本主義と社会主義とを抽象的に対置させることになれていて、しかもこの二つのもののあいだに、意味深長にも、「飛躍」という言葉をおくことにある（ある人々は、エンゲルスの本で読みかじった言葉の端をおもいだし、なおいっそうもったいをつけて、「必然の国から自由の国への飛躍」〔第 14 巻、477 ページ〕という言葉をつけくわえている）。社会主義の教師たちは世界史の転換という見地からみた急転を「飛躍」と呼んだのであること、またこの種の飛躍は、およそ 10 年ないしはそれ以上にもわたる時期をふくむものであること、――こういうことについては、いわゆる社会主義者の大多数――彼らは、社会主義について「書物のなかで読んだ」ことがあるが、真剣に事実をきわめたことはまだいちどもなかったのだ――は、考えもおよばない。このような時期には、悪名の高い「インテリゲンツィア」のあいだから、無数の泣き女が出てくるのも、当然である。あるものは憲法制定議会のことで泣き、あるものはブルジョア的規律のことで泣き、第三のものは資本主義的秩序のことで、第四のものは教養ある地主のことで、第五のものは帝国主義的強国であったことで泣く、といったありさまである。

大飛躍の時代のほんとうの興味は、つぎの点にある。すなわち、古いものの破片がおびただしくあって、新しいものの芽ばえ（それはかならずしもすぐには目につかない）よりいっそうはやく積まれていくことがままあるために、発展の系列あるいは発展の連鎖のなかからもっとも本質的なものをよりだすことが必要だということである。

革命が成功するためには、この破片をできるだけたくさん積みかさねること、つまり、古い機関をできるだけ多く爆破することが、なにより重要だという歴史的時機がある。ま

た、十分に爆破しつくして、その破片を地上からとりのけるという「散文的な」（小ブルジョア的革命にとっては「退屈な」）仕事が、当面の問題となる時機もある。また、まだがらくたのよくとりのけられていない地面にころがっている破片の下からのびてくる新しいものの芽を、念入りにみとっていくことが、もっともたいせつな時機もある。

革命家であるということ、社会主義の信奉者であるということ、一般に共産主義者であるということだけでは、不十分である。それぞれの特定の時機に、鎖の特殊な一環を、すなわち全力をあげてそれをつかめば、鎖全体をおさえることができ、しかもつぎの環への移行をしっかりと準備できるような、特殊な一環を見つけだすことができなければならない、このばあい、諸事件の歴史的連鎖におけるいろいろの環の順序、形態、つながり、相互の差異は、鍛冶屋がつくる普通の鎖ほどには単純でなく、またそれほど素朴なものでもない。

ソヴェト組織の官僚主義的歪曲との闘争は、ソヴェトが、勤労被搾取者という意味での「人民」とかたく結びついていることによって、またこの結びつきが融通性と弾力性とをもっていることによって、保障される。

第 27 巻『ソヴェト権力の当面の任務』P276～277

1918 年 3~4 月に執筆

ポイント

革命家であるということ、社会主義の信奉者であるということ、一般に共産主義者であるということだけでは、不十分である。それぞれの特定の時機に、鎖の特殊な一環を、すなわち全力をあげてそれをつかめば、鎖全体をおさえることができ、しかもつぎの環への移行をしっかりと準備できるような、特殊な一環を見つけだすことができなければならない、このばあい、諸事件の歴史的連鎖におけるいろいろの環の順序、形態、つながり、相互の差異は、鍛冶屋がつくる普通の鎖ほどには単純でなく、またそれほど素朴なものでもない。

現在の党の任務は、第一の任務、大多数の人民に自分の綱領や戦術の正しさを納得させることである。（P243:19-10 参照） 現代日本で日本革命の道すじを労働者階級を中心とする勤労諸国民に宣伝し、共感を得るためには、現代日本の現実の中から階級的矛盾と社会の行づまり、新しい社会を形成するための芽を誰の目にも見えるように示さなければならない。資本主義と社会主義とを抽象的に対置して、社会主義を遙か遠くのユートピアにし、資本主義の改善のみを闘争の課題としてはならない。いま日本は「産業の空洞化」の未曾有の危機の中にあり、日本の支配階級は未来の展望を示せず、空文句ばかりをならべたてている、そしてわれわれは、新しい社会主義日本をつくるための物質的な材料をすべて手に入れることが可能な時代に生きている。このことを示すことが現代という特定な時機の日本の鎖の特殊な一環なのである。